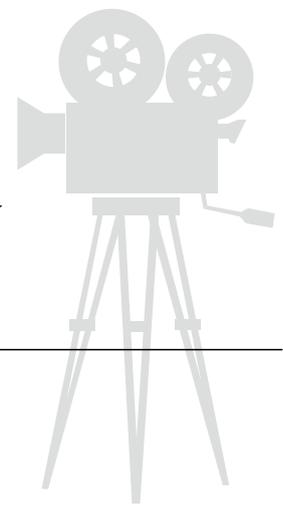


立ち上がり始めたラオス映画界

その変遷と現在



橋本 彩

2008年、ラオス¹⁾とタイの合作映画『サバイディー・ルアンパバーン』が上映されて以降、ラオス国内では映画に対する関心が年々高まっている。しかし、こうした状況に至るまで、ラオスにおける映画産業は約20年もの間、沈黙を保っていた。ラオス国家フィルム・アーカイブ&ビデオセンターのピチットによれば、20年と言わず、1953年にラオスがフランスから完全に独立して以降、ラオス国内に他国のような映画産業が存在したことはないと言ええる(Phichit 2001: 85)。ラオスで初めて上映された映画が何であるのか、ラオスで撮影された最初の映画はどれであるのか、そして最初の映画は何年にどの監督によって撮影された作品であるのか、誰も答えることができない(Phichit 2001: 84)。

では、まったくラオスで映画が制作されてこなかったのかといえば、それも否である。1950年代から1975年まで、ラオス国内では社会主義政権の樹立を目指すパテート・ラーオと王を中心に据えた王国政府が反目し合い、長い内戦を繰り広げていたが、その際にも、両者は自分たちの主義主張が正しいことを人々に知らしめるため、プロパガンダを目的とするニュースもしくはドキュメンタリー映画を制作し、上映していた。王国政府が統治していた首都のヴィエンチャンにおいては、独立した映画制作者や映画制作会社も存在していたようで、制作者の名前は明らかでないものの、数本の映画作品が作られていた。しかしながら、作品のタイトルは数本判明しているものの、フィルムはほぼ全て消失しており、残念ながら内容がいかなるものであったのかは不明である。しかしいづれにしても、その数はごく僅かであったため、ラオス国内だけで映画を完成させるだけの設備もなく、映画の制作システムが完全に商業化することはなかった(Phichit 2001: 85-86)。

映画館に関していえば、1950年代よりいくつかの

映画館が建てられ、1974年にはラオス国内に16の映画館が存在していたようである。一番多くの映画館があったヴィエンチャン²⁾では、ラオス映画のほかに、フランス、香港、タイ、インド、アメリカの映画が上映されていた(Post report 1964: 62)。

1975年に社会主義政権が成立すると、王国時代にヴィエンチャン地域で映画の制作をしていた政府機関はもちろんのこと、民間映画制作会社も排除され、新政府の映画制作機関が新たに政府の方針や思想、新しい指導者を紹介する映画作りをおこなうようになる。その一方で、1976年に設立された文化省映画部門によって、王国時代に引き続き、タイやインド、香港、少ないながらもフランス、イタリア、イギリス、アメリカから映画が輸入され、映画館で上映されていた。王国時代と異なる点といえば、社会主義国であるソ連、ベトナムからの映画が加えられていたことであろう。こうして年間平均70本ほど輸入されていた映画は、ラオスの人々の興味と関心を惹き、映画は人気の娯楽だったようである(Phichit 2001: 87)。

そして1980年代に入り、人びとが待ち望んでいたニュース映画やドキュメンタリー映画以外のラオス長編映画がようやく制作されるようになる。最初に制作されたソムット・ポール監督の『ジャール平原からの銃声』は、映画制作の技術力、および役者の演技力の低さから、観衆の関心をひくことなく、失敗に終わったが³⁾、1988年にソム・オック・ステイボン監督によって制作された『レッド・ロータス』は大成功を収めている(Phichit 2001: 88)。

『レッド・ロータス』に対する評価

『レッド・ロータス』は、現在でも鑑賞可能なラオス

2) 首都ヴィエンチャンには全国16館のうち9館があった(Phichit 2001: 86)。しかし、1964年の報告書ではエアコンが効いている地元の映画館は3館と記されている(Post report 1964: 62)。

3) 政府の検閲に通らず、公開されなかったとの説もある(Norindr 2012: 48)。

1) ラオスの正式名称はラオス人民民主共和国であるが、本稿では全て「ラオス」と表記する。

映画としては最も古い映画といえる。その監督であるソム・オック・スティポンは、政府の任命を受け、1977年より1986年までの9年間をチェコスロヴァキアのシャルル大学芸術・音楽学部映画・テレビ学科で過ごし、映画制作に必要な技術を習得して帰国した後、国営ラオ・シネマトグラフィ社に就職し、同じくインドヤソ連へ映画制作を学ぶために留学をしていた同僚たちと『レッド・ロータス』を制作している。ラオス人民民主共和国成立以前の1972年を舞台に、ラオス村落における家族の暮らしを通して、家庭内暴力による家族の崩壊、内戦によって引き裂かれる村民、貧困、伝統的慣習と近代的価値観の軋轢といったラオス国内の歴史的な内情を様々な角度から描いたこの映画は、『ジャーナル平原からの銃声』で多大なる損失を被った政府が、5,000ドルで映画を作るよう要請したもので、22日間という短期間で撮影が行なわれた。極端な低予算映画として、経済的、技術的な限界が映画の見栄えに影響を与えているとはいえ、『レッド・ロータス』は一定の評価を受けている。特に、唯一のラオス映画研究者ともいえるノリンダーは論考の中で、『レッド・ロータス』は唯一残っているラオス映画としての価値はあるが、映画作品として秀でていないわけではない、「脚本が機能的すぎる」と批評したアメリカ人デレック・エリーに対して、国家の代表団と交渉し、政府の検閲を通過させ、脚本を承認させるために妥協しなければならない共産党国内の映画制作者と脚本家の立場を無視した批判であると強く反論している。そして、むしろこうした状況下においても、「社会主義リアリズム」に少し距離を置き、教訓的なものを極力抑え、初めて芸術的な映画作品を制作したラオス人初の独創性と個性をはっきりと打ち出した映画監督であると述べ、彼を支持している (Norindr 2012: 45-46)。実際、『レッド・ロータス』はモスクワや福岡、タイのレムチャバン、プノンペン、ハノイの国際フィルムフェスティバルで上映され、1997年のプノンペン映画祭においては3位を受賞するなど、高い評価を受けた (Phichit 2001: 89-90)。こうして『レッド・ロータス』で実績を残したソム・オック・スティポンは1994年に自主映画制作会社ラオ・インター・アーツを設立したが、二本目の長編映画を撮影できずにいる。なぜなら、『レッド・ロータス』が制作されて以降、政府が映画制作に資金提供できる状況にはなく、最新式の映画設備を得ることもできずに、映画制作も映画上映も下火になっていったからである。1986年に政府の経済指針が刷新

され、民間セクターが映画界に投資できるようになったものの、政府の検閲が緩和されてもなお、ラオス映画の制作には関心が示されず、2000年までにはほぼ全ての映画館が閉鎖された (Phichit 2001: 90)。ヴィエンチャンに映画館が復活したのは2004年のことであるが、首都における映画館は2015年に新しい映画館ができるまでそこが唯一の映画館であった。

新しいラオス映画の夜明け?

1988年のラオス映画『レッド・ロータス』から約20年後の2008年に登場したのが、ラオス・タイ合作映画『サバイディー・ルアンパバーン』である。ラオスからはロシアで映画制作の勉強をしたアヌソーン・シリサクダー監督⁴⁾が、タイからはサックチャイ・ディーナン監督が参加し、ラオス情報文化・観光省の全面協力のもとに撮影された。物語は、オーストラリア育ちでバンコクを基点に仕事をするラオス人とオーストラリア人のハーフであるカメラマンが、彼の父親の故郷であるラオスへ赴くことになったところから始まる。最初はラオスにあまり好意をもっていなかった彼が、ガイド役のラオス人女性とラオス国内を南から北へ旅していくうちに、ラオスの良さに惹かれていくと同時にガイド役の女性との間にもロマンスが生まれるという展開である。ラオス人監督であるシリサクダーが「この映画の目的はラオスを世界に披露することである」と述べているように (Vientiane Times 26 May 2008: 29)、この映画はラオス政府の観光プロモーション映画という役目も担っていた (Vientiane Times 21 Nov 2007: 17)。そのため、ロマンスが前面に出過ぎることなく、ラオスの美しい風景やラオス人の素朴な暮らし、ラオスの伝統的な文化や習慣がふんだんに盛り込まれた作品となっている。この映画の主人公であるカメラマンに選ばれたアナンダ・エバリンハムは、映画の中では父親がラオス人で母親がオーストラリア人という設定であるものの、実際にはラオス人の母とオーストラリア人の父を両親にもつ。いずれにせよ、彼の起用はタイとの合作映画とはいえ、ラオス政府側がタイの色を極力抑えたラオス映画に仕立てたかった意図が読み取れる。彼がバンコクを基点に仕事をしながらも、オーストラリア育ちであるという設定まで設ける念の入れようである。映画はタイでも、ラオス

4) 1999年に映画・音楽制作会社ラオ・アート・メディアを設立している。

でも成功を取めたが、ラオス国内においては、映画を上映する映画館が著しく少ないため、各地の集会場や天候次第では野外スクリーンを設営して上映したようで、チケット代も場所によってまちまちだったため、正確な興行収入は不明である。ラオス政府としては、興行収入うんぬんよりも映画の成功を国民に印象づけることが狙いだったといえる。

在外ラオス人による ドキュメンタリー映画『裏切り』

『サバイディー・ルアンパバーン』と同時期の2008年に公開され、国際的な評価を得た『裏切り』というドキュメンタリー映画がある。映画を監督したのは、アメリカ人のエレン・クラスとラオス内戦終結後に難民としてアメリカへ渡った在外ラオス人タービスック・ブラサワットである。映画のナレーションもつとめるブラサワットの人生を通して、ラオス内戦中アメリカに加担したラオス人兵士の家族が戦後直面せざるを得なかった家族の離散、アメリカへ渡った後の荒廃したギャング生活、離散した家族との再会を果たしつつもハッピーエンドで終わらない現実を描いたこの作品は、クラスがブラサワットに出会ってから23年に亘って撮り続けた映像で構成されている。非常に長い年月をかけて制作された『裏切り』は、第81回アカデミー賞ベストドキュメンタリー作品賞へのノミネートをはじめとし、様々な映画祭で高い評価を得た。また、時を同じくして、ハリウッド映画界の大御所クリント・イーストウッドが監督した『グラン・トリノ』においても、ラオス内戦後にラオスからアメリカへ渡ったモン族のギャング抗争を描いていたため、世界の映画界で「ラオス」への関心がにわかに集まった時期も『サバイディー・ルアンパバーン』によってラオス国内の映画熱が高まりをみせた2008年であった。2008年はまさにラオス映画界の新たな夜明けの年であったといえるかもしれない。

映画制作を後押しするラオス国内の映画祭

こうして国内外でラオスと映画の結びつきが強くなった2008年を受け、2009年より首都ヴィエンチャンでは、国際映画祭「ヴィエンチャンナーレ」が開催されている。第1回目の映画祭はラオス政府の関与なく、ドイツ大使館が主体となり、欧州連合、フランス大

使館の後援を受けて、ラオ・ジャーマンハウスで開催する運びとなったが、第2回目からはラオス情報文化省が正式に関与し、国家文化会館での開催となっている。2009年から2013年までは隔年の開催であったが、2013年以降は毎年開催され、2015年は第5回目の映画祭となった。ヴィエンチャンナーレの特徴は、ラオス国内に若手の自主映画制作者を増やし、映画制作の技術力を底上げしていくことを目的とした短編映画コンテストが最終日におこなわれる点にある。毎回設定されるテーマに沿って作られる作品は、映画の質という意味では未熟さが残るものの、回を追うごとに表現の幅が広がっているようで、将来を見据えたこのコンテストの意義は大きい。

そしてもう一つ、ラオス国内では世界遺産都市である北部ルアンパバーンにおいても映画祭がおこなわれている。ルアンパバーン映画祭は、ラオス映画界を盛り上げようと精力的な活動を続けるアメリカ人ガブリエル・クーパーマンによって2010年に立ち上げられた。この映画祭では、ASEAN各国の映画大使が選んだ各国の優れた作品を観ることができる点に特徴がある。こうして徐々に映画に接する機会が増えているラオスでは、映画館の増設も予定されている。タイ資本のメジャー・シネプレックス・グループは、ヴィエンチャン中心地に2015年3月末オープンした大型ショッピングモール内に5つのスクリーンをもつシネマコンプレックスを既に設立しており、今後3年以内にはラオス国内で30の映画館を増設する予定であると発表している(The Nation 21 Aug 2015)。

ラオス人監督による長編映画 『アット・ザ・ホライズン』

徐々に映画をとりまく環境が整備され始めたラオスであるが、いまだ大きな障壁となっているのは、人材と制作資金の問題である。しかし、これらの問題を抱えながらも、映画制作を海外で学んできたラオスの若者たちは映画への情熱をもち、活動を開始した。2010年、海外留学経験者が中心となって映画制作会社ラオ・ニューウェーブ・シネマを設立したのである。メンバーの9割がラオス人で、1割は外国人スタッフで構成されているが、各メンバーとも昼間は生活のために別の仕事をもっており、映画制作はメンバーの自腹で制作されているのが現状のようだ。映画館の少ないラオスでは、市場が極端に小さいために利益が見込め

ないという。ラオ・ニューウェーブ・シネマの第一作目となる『アット・ザ・ホライズン』は、中心メンバーの一人であるアニサイ・ケオラが監督をつとめた作品である。作品の中に過激な暴力シーン、ならびに政府批判ともとれる内容が含まれていたため、ラオス政府の検閲に通らず、当初撮影の許可が下りなかったが、当時タイへ留学中であったケオラの卒業作品として、一般には公開しないことを条件に制作が許可された。この作品は、政府の意に沿わなかったために一般公開には至らなかったものの、だからこそむしろ政府の関与を極力なくした、ラオス人監督によるラオス長編映画として歴史的にも意義深い作品といえる。また内容も、時間軸をうまくずらしながら物語を展開していくサスペンスとしての映像編集も見事ながら、現在のラオス社会の構造的な問題にメスを入れるような視点が盛り込まれており、作品の完成度は高い。タイやベトナム、カンボジア、インドネシア、ドイツなど海外でも多く上映され、高い評価を受けたことから、その後、ラオス政府の検閲を受けた修正版がDVDとしてラオス国内でも販売され、ラオス国内の第2回ゴールデン・ナーガ・ラオ・エンターテインメント賞では、監督賞を含む4つの賞を受賞している (Vientiane Times 26 June 2013: 22)。その後もラオス映画の多くは身銭を切る方法で制作されているようであるが⁵⁾、公開されるラオス映画の本数も着実に増え、映画館へ赴く観客の数も増え始めているようである。

長い時を経て、初めてラオスに本格的な映画産業が定着するのもそう遠い未来ではないのかもしれない。

参考文献

- American Embassy, USAID and USIS. 1964. *Post report*. Vientiane.
- Norindr, Panivong. 2012. "Toward a Laotian independent cinema?", in David C.L. Lim and Hiroyuki Yamamoto (ed.) *Film in Contemporary Southeast Asia: Cultural interpretation and social intervention*. Abingdon, Oxon; New York, N.Y.: Routledge.
- Phichit, Bunchao. 2001. "Lao Cinema", in David Hanan (ed.) *Film in South East Asia: Views from the Region*. Hanoi: The Vietnam Film Institute.

5) 海外との合作映画は資金がつかないため、この限りではない。現在制作中の日ラオ合作映画『サーイ・ナム・ラーイ』にもラオ・ニューウェーブ・シネマのスタッフたちが制作に携わっている。

Southiponh, Som Ock. 1999. 山形国際ドキュメンタリー映画祭 Documentary Box #12 「あるアジア映画の始まり——ラオス、過去と現在」 <http://www.yidff.jp/docbox/12/box12-3.html> (2015年10月28日)

Taste of Laos. No.30. 2013年1-3月号.

The Nation. 2015年8月21日 <http://www.nationmultimedia.com/business/Major-Cineplex-targets-30-cinemas-in-Laos-within-t-30267063.html> (2015年11月1日)

Vientiane Times.

ヴィエンチャン国際映画祭: ヴィエンチャンナーレ <http://www.vientianeale.org/sabaidee/>

ルアンパバーン・フィルム・フェスティバル <http://lpfilmfest.org/>

映画リスト

凡例: 邦題、①原題、②監督名、③制作年、④制作国、⑤使用言語、⑥日本での公開

- 『サバイディー・ルアンパバーン』……①ສະບາຍດີ ຫຼວງພະບາງ / Good morning Luang Prabang, ②アスソーン・シリサクダー、サックチャイ・ディーナン、③2008、④ラオス、⑤ラオス語、タイ語、⑥未公開
- 『ジャール平原からの銃声』……①ສຽງປືນ ຈາກ ທົ່ງໄທ, ②ソムット・ポルセナ、③1983、④ラオス、⑤ラオス語、⑥未公開
- 『レッド・ロータス』……①ປິວແດງ / Red Lotus, ②ソム・オック・ステイボン、③1988、④ラオス、⑤ラオス語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭 (1994)
- 『裏切り』……①The Betrayal: Nerakhoon, ②エレン・クラス、タービスック・プラサワット、③2008、④アメリカ、ラオス、⑤英語、ラオス語、⑥未公開
- 『グラン・トリノ』……①Gran Trino, ②クリント・イーストウッド、③2008、④アメリカ、⑤英語、モン語、⑥劇場公開 (2009年)
- 『アット・ザ・ホライズン』……①ປາຍທາງ / At the horizon, ②アニサイ・ケオラ、③2011、④ラオス、⑤ラオス語、⑥未公開